

# 平成19年岐阜県観光レクリエーション動態調査結果

観光客数〔推計実人数〕:	52,841千人	(対前年比	+4.9%)
日帰り:	48,530千人	(対前年比	+5.4%)
宿泊:	4,311千人	(対前年比	0.4%)
観光消費額〔推計〕:	290,398百万円	(対前年比	+3.3%)
日帰り:	179,539百万円	(対前年比	+5.6%)
宿泊:	110,859百万円	(対前年比	0.2%)

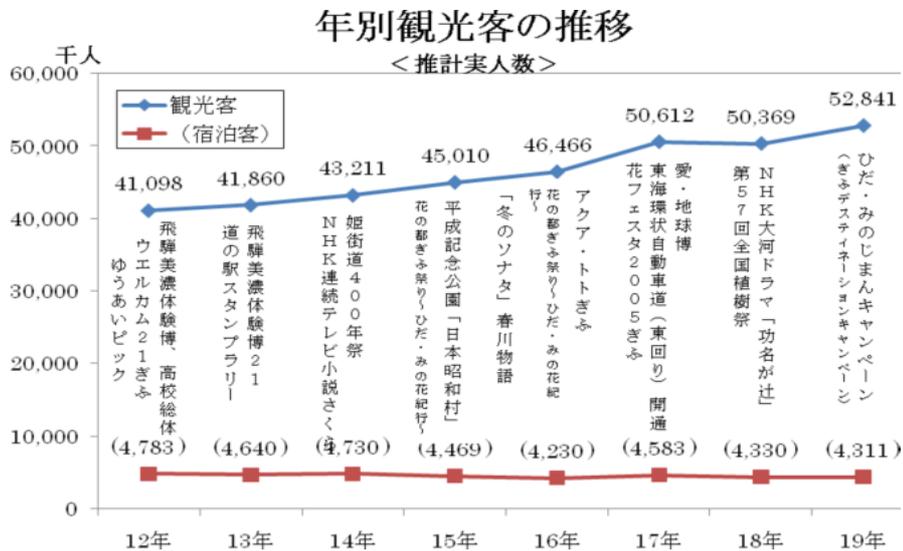
## 1 観光客数

### 全体の動向

平成19年の観光入り込み客数は、過去最高の52,841千人(対前年比 +4.9%)となった。ひだ・みのじまんキャンペーン(ぎふデスティネーションキャンペーン)を実施したほか、屋外イベントが天候に恵まれ、岐阜シティ・タワー43、道の駅「美濃にわか茶屋」等の新規オープン施設による効果にも後押しされ、観光客の入り込みが増加した。

うち宿泊客数は、県全体で対前年比0.4%減少の4,311千人であり、減少傾向にある中、ほぼ横ばいに推移した。

なお、県内集客数のトップは、開園後の平成12年以来トップであった河川環境楽園(各務原市)に代わり、東海環状自動車道東回りの開通に合わせてオープンし、平成18年10月に増床した土岐プレミアム・アウトレット(土岐市)の延べ4,260千人となった。



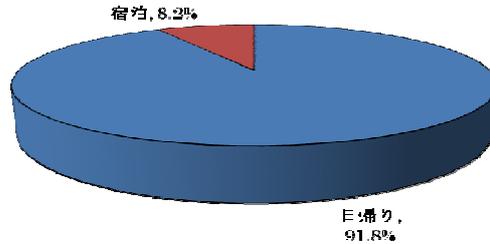
(1) 日帰り・宿泊別観光客数

平成19年の観光客数は52,841千人であった。

これを日帰り・宿泊別にみると、日帰り客は48,530千人、宿泊客は4,311千人と日帰り客が全体の91.8%を占めており、昨年よりも日帰り客の割合が0.4ポイント増加した(図1、表-1)。

圏域別に見ると、西濃圏域が日帰り客の割合が最も多く(構成比98.0%)、岐阜・中濃・東濃についても日帰り客が9割以上を占める。一方で飛騨圏域は、日帰り客67.8%、宿泊客32.2%と他圏域に比べ宿泊客の割合が高く、県全体の宿泊客4,311千人のうち2,267千人と全体の52.6%を占めている。

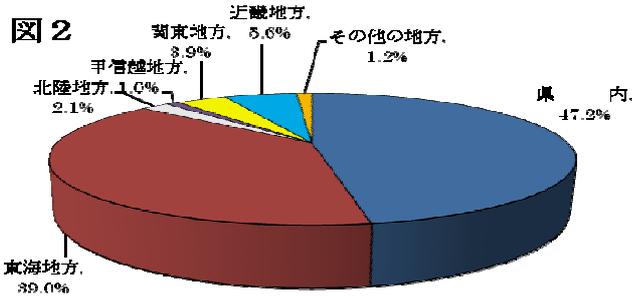
図1



(2) 居住地別観光客数

居住地別にみると、県全体では県内客は24,923千人(構成比47.2%)、県外客は27,918千人(構成比52.8%)で、特に飛騨圏域は県外客の割合が76.3%と高い。

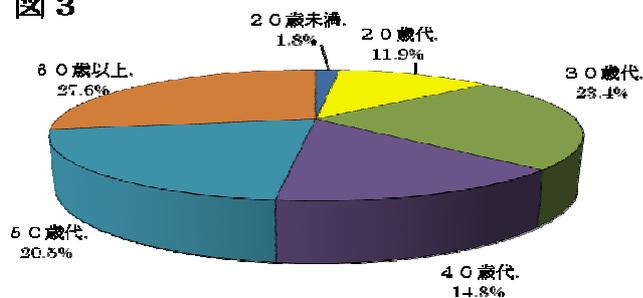
県全体では、県外客のうち7割以上が東海地方からの観光客であり、以下近畿地方、関東地方と続いている。また、東海地方からの観光客の割合が特に多いのは、西濃圏域および東濃圏域である(図2、表-2)。



(3) 男女別・年齢別観光客数

男女別で見ると、男性27,273千人(構成比51.6%)、女性25,569千人(構成比48.4%)と男性が若干多い。年齢別では、60歳以上が最も多く、以下30歳代、50歳代と続いている(図3、表-3)。

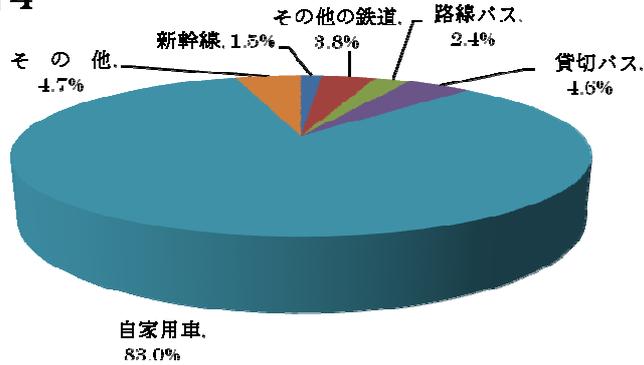
図3



(4) 利用交通機関別観光客数

利用交通機関別にみると、自家用車の割合が8割以上を占めている(図4、表-4)。一方で、飛騨圏域は自家用車以外の鉄道やバスの利用が29.3%ある。

図4



(5) 同行者別観光客数

同行者人数別に見ると、「2~3人」と「4~5人」で全体の約8割を占めており、少人数の観光形態の傾向に変化はない(表-5)。

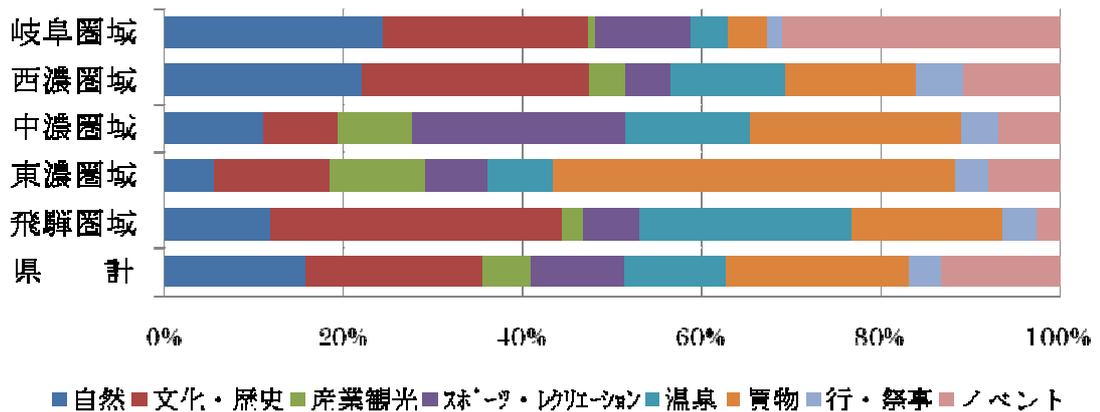
同行者別に見ると、約6割が「家族」で、以下「友人・知人」、「自分ひとり」と続いており、「団体旅行」の割合は低い。(表-6)

(6) 観光地分類別観光客数

観光地分類別にみると、「文化・歴史」と「買物」で全体の4割近くを占め、以下「自然」、「イベント」、「温泉」、「スポーツ・レクリエーション」、「産業観光」、「行祭事」と続く。

圏域別で見ると、岐阜圏域は「自然」や「イベント」、西濃圏域は「文化・歴史」、中濃圏域は「スポーツ・レクリエーション」、東濃圏域は「買物」、飛騨圏域は「文化・歴史」や「温泉」が多い(図5、表-7)。

図5



圏域の動向

< 観光客実人数 (推計) >

(単位: 千人、%)

	日帰り客数	宿泊客数	観光客数(合計)	対前年比
岐阜圏域	12,110	820	12,931	+7.5
西濃圏域	11,596	239	11,835	+2.9
中濃圏域	9,522	548	10,069	+6.8
東濃圏域	10,524	436	10,961	+5.1
飛騨圏域	4,778	2,267	7,045	+1.0
合計	48,530	4,311	52,841	+4.9

各圏域および県計の観光客数は、ともに実人数(1人の観光客が圏域内または県内の複数の観光地点を訪れても、圏域内または県内で2泊以上滞在しても、観光客、宿泊客はそれぞれ1人と数える。)を推計したものである。

$$[(\text{観光客実人数}) = (\text{観光客延べ人数}) / (\text{平均訪問地点数(単位:箇所)})]$$

千人未満を四捨五入しているため、内訳の計は合計と一致しないことがある。

岐阜圏域

- 観光客数は12,931千人(対前年比+7.5%)と昨年に比べ899千人増加した。このうち、日帰り客数は12,110千人(対前年比+7.7%)となり、前年に比べ871千人増加し、宿泊客数も、820千人(対前年比+3.5%)と28千人増加した。
- 観光地点別では、岐阜シティ・タワー43の新規オープンに加え、好天に恵まれた長良川花火大会や道三まつりでの観光客の入り込みが大幅に増加した。

西濃圏域

- 観光客数は11,835千人(対前年比+2.9%)と昨年に比べ330千人増加した。
- 観光地点別では、国営木曽三川公園(海津市)やチューリップ祭(海津市)の入り込み大幅増とともに、徳山ダムを観光の目玉とする徳山会館(揖斐川町)と揖斐川温泉藤橋の湯(揖斐川町)の新規オープンにより観光客の入り込みが増加した。
- 西濃圏域は他圏域と比べると、日帰り客の占める割合が最も多い(98.0%)ことも特徴である。(表-1)

中濃圏域

- 観光客数は10,069千人(対前年比+6.8%)と昨年に比べ644千人増加した。
- 観光地点別では、道の駅「美濃にわか茶屋」(美濃市)の新規オープンや、道の駅「白尾ふれあいパーク」(郡上市)、JAめぐみのとれったひろば(可児市)の新設効果に加え、美濃和紙あかりアート展(美濃市)等での観光客の入り込みが増加した。一方、平成15年の開園インパクトが薄れた平成記念公園「日本昭和村」(美濃加茂市)は、延べ642千人で4.7%の減少となり、減少幅が縮まった。また、花フェスタ記念公園(可児市)は、延べ484千人で2.8%の増加となり観光客の入り込みが増加に転じている。

東濃圏域

- 観光客数は10,961千人(対前年比+5.1%)と昨年に比べ533千人の増加であった。
- 観光地点別に見ると、土岐プレミアム・アウトレット(土岐市)が昨年10月に行った増床効果や、昨年12月にオープンした岐阜中津川ちこり村(中津川市)の新設効果に加え、馬籠宿、好天に恵まれた多治見陶器まつりの観光客の入り込みが大幅に増加した。
- 東濃圏域は、他圏域と比べると、居住地別観光客では、県外客のうち東海地方からの割合が特に高いのが特徴である。(84.5%)(表-2)

飛騨圏域

- 観光客数は7,045千人(対前年比+1.0%)と昨年より微増した。うち、宿泊客数は、2,267千人(対前年比+0.6%)と微増であったが、有名観光地のもとに積極的な海外誘客活動を展開した高山市や下呂市の外国人宿泊客については、大幅な増加が見られた。
- 観光地点別に見ると、高山市の古い町並みや下呂温泉、白川郷合掌造り集落、奥飛騨温泉郷等の主要観光地の観光客の入り込みは増加したものの、鈴蘭高原スキー場の閉鎖や道の

駅「奥飛騨温泉郷上宝」、「飛騨金山ぬく森の里」などにおける入り込み客の減少に加え、昨年実施され148千人を集客した高山市市政70周年特別事業の高山祭屋台特別曳き揃えの影響により、全体として微増にとどまった。

- ・飛騨圏域は、他圏域と比べると、観光客数における宿泊客の割合が3割以上と多く（県全体：約1割）（表-1）、県外客の割合も7割以上と多い（県全体：約5割）（表-2）といった特徴があり、鉄道・バスの利用（表-4）や、団体旅行の割合も高い（表-6）。

#### 外国人延べ宿泊客数の動向

外国人の延べ宿泊客数について、全体では220,973人(対前年比+17.7%)と過去最高を記録した。特に高山市を中心に飛騨圏域で約29千人の増加となった。

<参考：圏域別延べ宿泊客数の年別推移>

(単位：千人)

	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年
岐阜圏域	1,046 (27)	1,024 (33)	1,275 (48)	1,056 (35)	1,092 (40)
西濃圏域	322 (6)	299 (6)	426 (29)	445 (23)	372 (22)
中濃圏域	760 (5)	757 (6)	804 (9)	775 (5)	799 (5)
東濃圏域	633 (2)	603 (2)	662 (6)	598 (2)	563 (2)
飛騨圏域	3,970 (37)	3,679 (47)	3,690 (104)	3,616 (122)	3,644 (151)
県計	6,730 (77)	6,361 (93)	6,856 (195)	6,490 (188)	6,470 (221)

表11（延べ宿泊客数）を年別にまとめたものである。1人の宿泊客が圏域内または県内の2箇所まで宿泊する場合、圏域内または県内で2連泊する場合、宿泊客はそれぞれ2人と数える。

下段のカッコ内は外国人の延べ宿泊客数である（内数）。

なお、外国人宿泊客数の実人数を推計が困難であるため、延べ宿泊客数のみを計上している。

## 2 観光消費額

平成19年の観光消費額の総額は290,398百万円（対前年比+3.3%）で、そのうち日帰り客分は179,539百万円（対前年比+5.6%）、宿泊客分は110,859百万円（対前年比-0.2%）であった。

これを1人当たりの平均消費額で見ると、日帰り客は3,700円（対前年比+0.2%）、宿泊客は25,715円（対前年比+0.3%）であり、それぞれの平均消費額は増加したが、結果的に県外の日帰り客の動向が活発であったため、宿泊客数自体の減少が全体的な平均消費額の減少（対前年比-1.5%）につながったといえる。

## 3 経済波及効果（推計）

平成19年の生産誘発額は412,353百万円（対前年比+4.3%）で、就業誘発効果は43,557人（対前年比+2.5%）となった。

	平成19年	平成18年	対前年比
生産誘発額	412,353百万円	395,333百万円	104.3%
就業誘発効果	43,557人	42,495人	102.5%

<参考> 中津川市の製造品出荷額等 415,239百万円（H18 県工業統計調査）  
瑞浪市の人口 41,832人（H18.10.1 推計人口）

## 【参考】調査の概要

本調査は、社団法人日本観光協会の「全国観光統計基準」に基づく。

### 1. 調査期間

平成19年1月1日から平成19年12月31日まで

### 2. 調査対象

#### (1) 観光地点

観光地点の定義

年間観光客が50,000人以上、または季節的観光客が月間5,000人以上

観光地点の分類

観光地点の分類は以下の区分による。

- ・「自然」...優れた自然環境であり、管理者が常駐している景勝地(山岳、高原、湖沼、河川景観、その他鍾乳洞など特殊地形)。
- ・「文化・歴史」...文化財や歴史的建造物を有し、管理者が常駐している施設(城郭、神社・仏閣、庭園、町並み、旧街道、史跡、博物館、資料館、美術館、動植物園、水族館、その他橋、駅、ビル、ダムなど建造物)。
- ・「産業観光」...広範囲な敷地を有し、管理者が常駐している工場、農園、市場、牧場、伝統工芸等の産業拠点(観光農林業、観光牧場、観光漁業、伝統工芸、その他の産業観光施設)。
- ・「スポーツ・レクリエーション」...管理者が常駐している施設。  
ただし、小規模の施設、地元利用者が大半を占める施設は除外し、観光利用の対象として取り扱っているものに限定(ゴルフ場、スキー場、テニス場、アイススケート場、サイクリング場、ハイキングコース、キャンプ場、自然歩道・自然研究路、大規模公園、レジャーランド・テーマパーク、複合的スポーツリゾート施設、その他スポーツ・レクリエーション施設)。
- ・「温泉」...温泉あるいは鉱泉の湧出する地域であり、管理者が常駐している施設、地域(温泉、その他入浴施設)。
- ・「買物」...管理者が常駐している施設。  
ただし、小規模の施設、地元の利用者が大半を占める施設は除外し、観光利用の対象になっているものに限定(道の駅、複合的ショッピング施設、ショッピング街、朝市・市場、郷土料理店・レストラン)。
- ・「行祭事」...地域住民の生活において伝統と慣行により継承されてきた、定期的に行われる大規模な行祭事(行祭事、郷土芸能、地域風俗)。
- ・「イベント」...常設もしくは特設の会場において、一定の成果を期待して人や金を集めることを目的として行われる大規模なイベント(博覧会、展示会、見本市、コンベンション、国体、花火大会)。

#### (2) 宿泊施設

宿泊施設の定義

管理者が明確で常駐しており、毎日の利用者数を確実に把握することができ、宿泊に必要なサービスを営利目的で提供する、観光客を宿泊させるための施設。ただし、個人所有の別荘、リゾートマンション、ホームステイ先の個人住居、同伴ホテル・旅館、カプセルホテル等は除外。

### 3. 調査実施機関

県、市町村(平成19年末時点の市町村の別による)